

# スターチス・シヌアータの促成栽培に関する研究

## 第1報 催芽種子、苗の低温処理が生育開花に及ぼす影響

\*中村新一・田中幸孝・小林泰生・豆塚茂実・近藤英和 (福岡県農業総合試験場・\*福岡県農業技術課)

Shin-ichi NAKAMURA, Yukitaka TANAKA, Yasuo KOBAYASHI, Shigemi MAMETSUKA and Hidekazu KONDO :  
Studies on the Forcing Culture of Limonium sinuatum.

### 1. Effects of Chilling Treatment with the Hastening of Germinations and Nursery Plants on Growth and Flowering

スターチス・シヌアータの開花促進は、催芽種子の低温処理効果は高いが、高温期に育苗すると本葉8~10枚までの若齢苗で脱春化が生じる。このため、促成栽培では高冷地育苗や冷房育苗により苗の脱春化を回避する方策をとっている。また、4週間程度の苗の低温処理により開花を促進させる検討も行われている。本報では、催芽種子低温処理と苗低温処理の組合せにより、秋冬季に開花させる方法について検討した。

#### 1. 材料及び方法

供試品種は“アーリーブルー”を用いた。播種は1986年3月1日、4月1日、4月10日にそれぞれビートパンに行い、催芽2日後からそれぞれ2.5℃4週間の低温処理を行った。低温処理後は7.5cmポリポットに鉢上げし、無加温硬質アクリルハウスで育苗した。育苗中の温度は、27℃を超えないよう十分換気して管理した。低温処理は本葉5枚、10枚、15枚の苗をそれぞれ1986年5月22日から1986年7月17日まで2.5℃、8週間で行った。定植は1986年7月17日に行い、ガラス温室を用い幅80cm、深さ20cmのベンチに20cm×20cmの4条植えとした。無処理区は、5枚区と同様に育苗を行い、1986年6月20日にガラス温室へ定植した。栽培中の夜温は12℃とし、1986年10月25日から1987年3月31日まで加温した。

#### 2. 結果及び考察

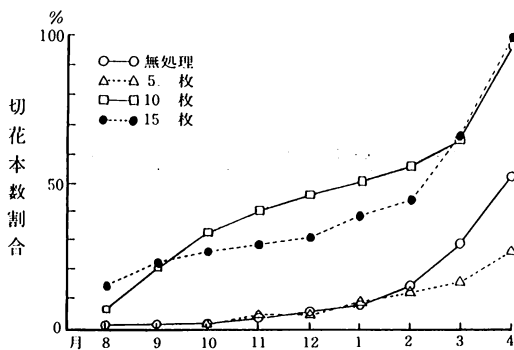
開花は8月から始まり、翌年の5月以降も開花したが調査は4月30日まで行った。第1図は、最も切花本数が

多かった15枚区の総切花本数を100として、それぞれの区の切花本数を表したものである。その結果、この図にみられるように8月から4月までの総切花本数割合は、15枚区、10枚区、無処理区、5枚区の順に低くなり、それぞれ100%、98.2%、53.5%、27.9%を示した。3.3㎡当たりの切花本数では、それぞれ672.0本、660.0本、59.5本、187.5本であった(第2図)。8月から1月までの切花本数は、10枚区、15枚区が多く、特に10枚区では総切花本数の52.3%がこの期間内に開花した。無処理区と5枚区の開花は、無処理区が8月から開花を始めたが、5枚区では10月からであった。これは定植時期と苗令の違いによる脱春化が影響したものと推察される。

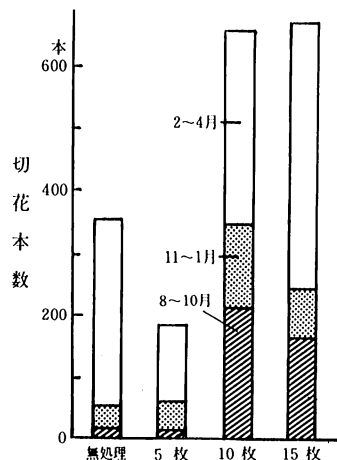
切花長は、8~10月ではいずれの区も高温期ほど短くなる傾向があり、70cm以下であった。11月以降では15枚区が最も長く、次いで無処理区、10枚区でいずれも70cm以上であった。

切花重量は、8~10月では各区とも高温期ほど軽くなり30g以下となった。11月以降では15枚区が最も重くなり、次いで無処理区、10枚区でいずれも30g以上であった。

以上のように、催芽種子と苗の低温処理を組合せた促成栽培について検討を行った結果、3月1日、4月1日に播種した催芽種子を2.5℃で4週間低温処理し、さらに脱春化が生じないように育苗管理した10、15枚の苗を2.5℃で8週間低温処理することにより8月からの開花が可能であった。



第1図 催芽種子・苗低温処理が開花に及ぼす影響



第2図 総切花本数